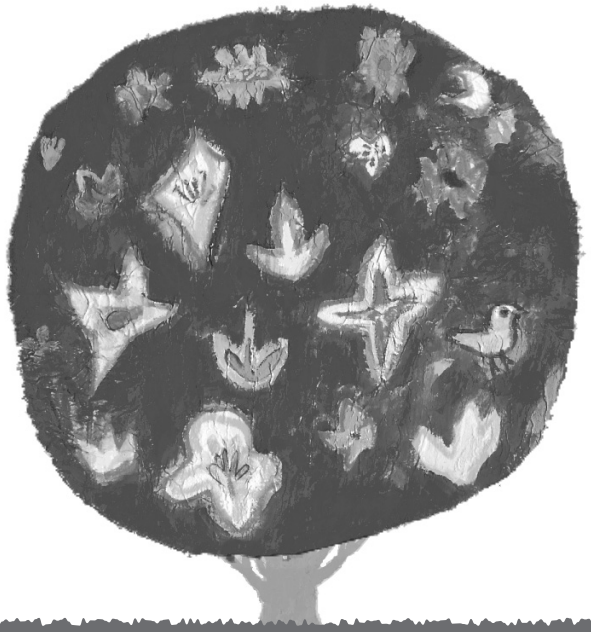
見本

保育者をめざす人の保育内容

「言葉」

第2版

駒井 美智子 編



みらい

見本

はじめに

近年、わが国では少子高齢化が急速に進展し、ついに「超高齢社会」を迎えた。これにより、人口構成のバランスが崩れ、さまざまな問題と課題が日本社会に浮上していることは、周知のとおりである。とりわけ、わが国の将来を担う「次世代人材育成」は喫緊の課題であり、乳幼児に対する「充実した保育」はその中心に位置づけられるべき課題であろう。

それでは、どのような保育が「充実した保育」なのであろうか。もちろん、待機児童の問題は今すぐに解消すべき課題であるが、数の上で待機児童の問題を解消したとしても、それだけでは「充実した保育」には不十分である。充実した保育には、保育の質を向上させていくことが求められる。しかしながら、保育の質は多面的かつ階層的で、これ自体がとても難しい問題である。

本書は、こうした保育の質を「言葉」の面からとらえ、解説しようとするものである。乳幼児が社会のなかに溶け込み、成長していくためには、「言葉」が欠かせないことは誰もが認めるところであり、質の高い保育を考え、実践しようとする際に、「言葉」はその中核を担うテーマとなる。こうした考え方に基づき、本書では言葉をまだ十分に理解していない乳幼児に対して、保育者がどのように言葉の理解とそれを通じた成長を保護者とともに支援していくかについて学べるように構成した。具体的には、保育内容「言葉」の学習について、基礎編、実践編、実技編、発展編という流れで学べるように工夫し、ステップアップしながら学習できるようにしている。また、巻末には、言葉に関連した教材実践例等を掲載しているが、それだけではなく、子どもの発達全体に関連する発達表等も掲載し、他領域との関わりや、他の発達との関連を総合的に理解して、学びを深められるよう工夫している。

なお本書は、2018（平成30）年施行の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をふまえて新たに編集した第２版である。第２版では記述の見直しや付録のさらなる充実を図っている。保育者をめざす皆さんが本書で学び、子どもたちの「言葉」の成長を支援・援助する立派な保育者が誕生することを執筆者全員が願っている。

最後に、本書を発行するにあたってご尽力いただきました執筆者の先生方、幼稚園、保育所（園）、認定こども園の関係者の皆様、および（株）みらいの方々に対して厚く御礼申し上げます。

2018年２月

編者　駒井　美智子

もくじ

見本

はじめに

基 礎 編

第１章　保育内容「言葉」の意義 …… 13

第1節 人間と言葉 …… 13

（1） 人間としてのコミュニケーションのはじまり 13
（2） 関わりから言葉へ 14
（3） 言葉を手段として使う 16

第2節 幼児と言葉 …… 17

（1） 伝え合いから育つ―コミュニケーションとしての手段― 17
（2） 思考してから生み出す言葉―思考する手段― 18
（3） 行動を調整しながら達成する―行動を調整する手段― 18
（4） 私の気持ちを伝える―自己を表現する手段― 19
（5） ものや行為を言葉で表現する―ものや行為を意味づける手段― 20

第3節 幼児教育と保育内容「言葉」…… 21

（1） 言葉の育ちを保障すること 21
（2） 保育内容「言葉」における保育者が担う役割 21

第２章　領域「言葉」の「ねらい」および「内容」… 25

第1節 領域「言葉」とは …… 25

第2節 乳児保育に関わる「ねらい」および「内容」…… 25

（1） ねらい 25
（2） 内容 26

第3節 1歳以上3歳未満児の保育に関わる「ねらい」および「内容」 28

（1） ねらい 28
（2） 内容 29

第4節 3歳以上児の保育に関わる「ねらい」および「内容」…… 31

（1） ねらい 31
（2） 内容 33

第5節 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 …… 35

見本

第３章　子どもの言葉の発達 …… 39

第１節 言葉のめばえ …… 39

（１）　言葉を育む環境―生後間もない乳児への声かけから―　39
（２）　言葉の発声訓練としての笑いと身体の動き　39
（３）　喃語が言葉になるまで―保護者の関わりと意味づけ―　41

第２節 言葉による世界の意味づけ …… 42

（１）　目に見えないものを他者と共有する―表象機能の発達―　42
（２）　知っていることと結びつけて言葉の意味を理解する　43

第３節 言葉による世界の秩序化 …… 45

（１）　コミュニケーションの道具から思考の道具への移行　45
（２）　感情や経験と結びついた「自分なりの表現」　47

第４節 言葉とはどのようなものだろう？ …… 48

第４章　子どもの言葉と環境 …… 51

第１節 子どもの言葉が育つ環境とは …… 51

（１）　発達初期の養育環境の重要性　51
（２）　応答的環境と愛着関係　53

第２節 話し言葉と環境 …… 54

（１）　話し言葉からはじまる言葉の理解と表現　54
（２）　環境としての保育者　55
（３）　環境としての仲間と集団生活　57

第３節 読み・書き言葉と環境 …… 58

（１）　幼児期における書き言葉　58
（２）　文字の認識と言葉遊び　58
（３）　保育現場の文字環境　59
（４）　絵本を読む　59

実 践 編

第５章　保育者の指導・支援 …… 63

第１節 保育者の関わり …… 63

（１）　保育者が「関わること」の意味　63
（２）　指導と支援　65

見本

第2節 0歳児～2歳児の言葉と保育者の関わり …… 66
（1） 6か月未満 66
（2） 6か月～1歳3か月未満 67
（3） 1歳3か月～2歳未満 68
（4） 2歳児 69
第3節 3歳児～6歳児の言葉と保育者の関わり …… 70
（1） 3歳児 70
（2） 4歳児 71
（3） 5歳児 72
（4） 6歳児 73
第4節 育ちの連続性と指導・支援の継続性 …… 73

第6章 言葉での関わりに配慮を必要とする子どもへの指導・支援 …… 75
第1節 言葉の発達に課題を抱える子どもとは …… 75
（1） 言葉を話す前に 75
（2） 言葉の育ちに影響するもの 76
第2節 言葉の発達の課題 …… 76
（1） 発語に関する課題 76
（2） 意味の理解・コミュニケーションに関する課題 78
第3節 保育者による言葉の発達に課題を抱える子どもへの指導・支援 …… 80
（1） 保育者の関わり 80
（2） 園生活での学び 82
（3） 居心地のよい環境を整える 83
第4節 言葉の発達に課題を抱える子どもの保護者への支援 …… 84
（1） 保護者との連携 84
（2） 保護者からの相談 84
第5節 専門機関等との連携 …… 85

第7章 保育者の言葉 …… 87
第1節 言葉の発達を支援する保育者の言葉 …… 87
（1） 言葉の発達を支援する保育者 87
（2） 保育と言葉 88
第2節 自分自身の言葉を振り返る …… 89

見本

第3節 事例からみる保育者の言葉 …… 90
第4節 保育者自身の言葉を育む …… 95

実技編

第8章　児童文化財（1） …… 99
第1節 児童文化とは …… 99
第2節 絵本 …… 99
（1） 絵本とは何か　99
（2） 絵本の種類　100
（3） 絵本の役割　100
（4） 読み聞かせの基本　102
（5） 絵本の選び方　103
第3節 ストーリーテリング …… 104
（1） ストリーテリングとは　104
（2） 保育とお話　105
（3） お話の選び方　107
（4） お話の覚え方　107
（5） お話の語り方　108
（6） お話の実際　109
第4節 紙芝居 …… 110
（1） 紙芝居とは　110
（2） 演じる前の準備　111
（3） 演じ方の３つの基本　111
第9章　児童文化財（2） …… 115
第1節 言葉遊びとはなにか …… 116
第2節 子どもと楽しむ言葉遊びの実践 …… 116
（1） なぞなぞ　116
（2） しりとり　117
（3） 言葉集め　118
（4） 伝言ゲーム　119
（5） 変身する言葉・逆さ言葉　119
（6） ごっこ遊び　120

見本

第3節 伝承遊びの実践 …… 122

第4節 詩の世界 …… 124

第10章　児童文化財（3） …… 127

第1節「演じられる物語」を体験すること …… 127

（1） 豊かな言葉の体験としての「演じられる物語」 127
（2） 視聴覚系児童文化財の教材研究で大切にしたいこと 128

第2節 ペープサート …… 129

（1） ペープサートとは 129
（2） ペープサートを製作する 129
（3） 演じる、保育活動を実践する際の留意点 130
（4） 実践してみよう―ペープサート「ねずみじょうど」 130

第3節 パネルシアター …… 131

（1） パネルシアターとは 131
（2） パネルシアターを製作する 131
（3） パネルシアターのしかけ 131
（4） 演じる、保育活動を実践する際の留意点 132
（5） 実践してみよう―パネルシアター「三びきのやぎ」 132

第4節 エプロンシアター …… 133

（1） エプロンシアターとは 133
（2） エプロンシアターを製作する 133
（3） 演じる、保育活動を実践する際の留意点 134
（4） 実践してみよう―エプロンシアター「なにができるかな？」 134

第5節 人形劇 …… 135

（1） 人形劇とは 135
（2） 人形劇を製作する 135
（3） 演じる、保育活動を実践する際の留意点 136
（4） 実践してみよう―人形劇「ブレーメンの音楽隊」 136

第6節 劇遊び …… 137

（1） 劇遊びとは 137
（2） 劇遊びのおもしろさ 137
（3） 劇遊びの発展と保育者の留意点 137
（4） 実践してみよう―劇遊び「おおきなかぶ」 138

見本

発 展 編

第11章 「言葉」の指導計画 …… 143

第1節 指導計画の考え方 …… 143

（1） 教育課程・全体的な計画 143
（2） 長期の指導計画 144
（3） 短期の指導計画 144
（4） その他の計画等 145
（5） クラス担任としての指導計画の作成 146

第2節 「言葉」の指導計画の作成 …… 147

（1） 領域「言葉」と指導計画 147
（2） 事例からみる「言葉」の指導計画 148

第12章 発展事例―保育内容「言葉」のまとめ― …… 153

第1節 発展事例（1） …… 153

（1） 発展事例①―生後５か月 154
（2） 発展事例②―１歳３か月～２歳未満 154
（3） 発展事例③―３歳 155

第2節 発展事例（2） …… 155

第3節 発展事例（3） …… 156

（1） 発展事例①―岩手県町村部 156
（2） 発展事例②―首都圏―公立保育所 157

第13章 言葉と国語教育―小学校教育へ― …… 161

第1節 国語へのつながり …… 161

第2節 学習のはじまり …… 166

付 録

1 心・身体・言葉の発達表（目安） 173
2 パペットを作成してみよう 181

3　エプロンシアターの実践（おおかみと七ひきのこやぎ）　182
4　遊びからみる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」　186
5　主な園行事の紹介　188

見本

見本

第1章
保育内容「言葉」の意義

第1節　人間と言葉

（1）人間としてのコミュニケーションのはじまり

言葉は人間特有のコミュニケーション手段である。人間は、言葉の獲得によって、自らの気持ちや考え、知識や経験を他者へ伝えることができるようになる。しかし、人間は言葉を獲得する以前から、コミュニケーション手段を他の方法でも獲得している。ここでは、人間が生まれてから言葉を獲得するまでの間に（赤ちゃんが）培っていくコミュニケーション手段について考えてみることにしよう。

① 「目」と「目」を合わせる

人間は、生まれた直後から抱きかかえられたり、床に仰向けに寝かされたりしながら、Face to Face（顔と顔の向き合い）でコミュニケーションを取る動物である。京都大学霊長類研究所の松沢哲郎はこれまでの研究成果から、出産直後から子どもが母親から離れて、仰向けになっても安定しているのは、互いに顔を向き合い、目と目を合わせ、にっこりと微笑みながらコミュニケーションを取るからであるとしている。たとえば、赤ちゃんチンパンジーの場合には、常にしっかりと母親の体にしがみつき、母親も子どもを抱いているため、もし、仰向けに置かれた際には赤ちゃんチンパンジーはもがき、安定しないという。すなわち、「人間は生まれながらにして、見つめ合い、微笑み合い、声でやりとりをして、自由な手で物を扱う、そういう存在として生まれてきている」[1)]ということなのである。

このように、人間は互いの言葉によるコミュニケーション以前の手段として、まず「目」と「目」を合わせて通じ合うことをはじめる動物なのである。

② 授乳行動にみるコミュニケーション

日々、赤ちゃんが成長するために必要な行動の一つとして授乳がある。こ

見本

の授乳行動に関して、正高信男は、赤ちゃんには平均的に25秒母乳を吸い、14秒くらい休むという一般的な行動パターンがあることを発見している。さらに、このパターンは、赤ちゃんが吸うのをやめると多くの母親が優しく赤ちゃんを揺さぶり、声をかけるという行動があることから出現するものであるとしている。そして赤ちゃんは、母親からの刺激を受けた後、再び吸いはじめる。その行動の繰り返しが授乳の一般的な行動パターンなのである。

このような授乳場面での母子の姿から、赤ちゃんは言葉を発する以前から行動による応答的な関わり（対話のような関わり）を行っていると考えられる。

③ 「泣く」と「保護者の行為」の繰り返しのなかで

赤ちゃんの欲求は、「泣く」ことで表現される。すると、保護者は「どうしたの？　お腹がすいたのかな？　おむつが濡れたのかな？」などと話しかけ、赤ちゃんの欲求に応えようと働きかける。赤ちゃんは生まれた直後からこのやり取りを繰り返し経験することによって、泣くことで自らの欲求が満たされることを知り、成長するにしたがって欲求が他者への要求に変化していくのである。保護者もまた、赤ちゃんの欲求の違いに気づくようになり、泣き方や表情、行動等によって何を欲求しているのかを理解していき、その欲求に応じた接し方をするようになる。

このようなやり取りの繰り返しのなかで、赤ちゃんは自らの意思を伝えるためにコミュニケーションを取ろうとするだけでなく、信頼できる人との関係性を築いていくのである。

（2）関わりから言葉へ

赤ちゃんは、他者の存在に気づき、自らの欲求がその他者とコミュニケーションを取ることで伝わることを知ると、保護者や保育者などの他者との関わりをさらに深めていく。この関わりのなかで、言葉はどのように育っていくのだろうか。

① バーバルとノンバーバルなコミュニケーション

人間は、生まれてから有意味語（意味のある言葉）を一語発するまでに、平均的に生後から１年くらいの期間が必要となる。しかし、それまでの間に言葉を発していないということではない。人間のコミュニケーションには、バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションの大きく２つのコミュニケーション方法が存在する。バーバルコミュニケーションとは、言語コミュニケーションともいわれ、会話や文字、印刷物などをとおしたコ

見本

ミュニケーションのことを意味する。ノンバーバルコミュニケーションとは、非言語コミュニケーションともいわれ、顔の表情や視線、手振り、身振り、声のトーンといった言語的表現以外のコミュニケーションを意味する。言語技術を中心とした教授法の研究者であるマジョリー（Marjorie F.Vargas）は、「話しことばによるコミュニケーションを受信するには、もちろん聴覚がもっとも重要だが、非言語コミュニケーションでは、人間の五官すべてが、メッセージを受け取ることになる」[2)]と述べている。

有意味語を発する前までの赤ちゃんは、この非言語コミュニケーションで人とのやり取りを行うことが多い。「微笑みかける」「快･不快を表情で表す」「手を振る」「ほしいものを指さす」などはそのようなやり取りの一部である。つまり、赤ちゃんはノンバーバルなコミュニケーションによって、言葉を発する以前から言葉を発しているのと同じようにまわりの人に働きかけ、相手からの言葉による応答の繰り返しによって対話をしているといえる。

②　語りかける言葉を聞き、言葉の意味を理解する

乳児期の発達過程において、まわりの人たちから多くの言葉を語りかけられることは重要である。よく「言葉のシャワーを浴びるように」と表現されることがあるが、正しく、日々いくつもの言葉が注がれることによって、子どもの言葉の育ちに変化が与えられる。ここで、乳児と保育者による出来事を紹介しよう。

事例１）『もこ もこもこ』（０歳児）

Ａ児（11か月）を抱っこしていたＢ保育者が、ふとＡ児の視線の先をたどってみると、Ａ児は保育室の壁を見渡している。その壁に、昨日読んだ『もこ もこもこ』*1の絵本が飾ってあることに気がついたＢ保育者は、そっとＡ児の耳元で「もこ…」とささやいてみた。すると、Ａ児はすぐさま保育者と顔を見合わせ、にっこり微笑むと、絵本の方向を指さした。「あら、昨日読んだこと覚えていたのね。私もうれしい」とＢ保育者も微笑み返した。

Ａ児が読んでほしいという要求をしたことから、Ｂ保育者が絵本を読みはじめる。「もこ、もこもこ」「ふんわ、ふんわ、ふんわ、ふんわ…」１ページごとに繰り返される絵本をとおしたＢ保育者からの言葉にＡ児は熱心に聴き入り、時にＢ保育者と目を合わせながらにっこり笑う。

「ツーン」という言葉のページにさしかかると、Ａ児にハッとし

＊１　『もこ　もこもこ』谷川俊太郎作、元永定正絵 文研出版 1977年

見本

た表情が表われ、Ｂ保育者に人さし指を向ける。「そうね、ツーンね」Ｂ保育者も人さし指を出し、Ａ児の指に向き合わせる。「どこかで、ツーンって遊んだことがあるんだね」とＢ保育者は言葉をかけながら、２人で何度もその遊びを繰り返していた。

この事例１）のＡ児とＢ保育者のやり取りから、赤ちゃんは言葉を発していなくとも、まわりの人たちから言葉が与えられることによって、理解できる言語数を増やし、さらには、言葉の意味と行動の意味をつなげていることがわかる。それだけ、赤ちゃんは十分に言葉を理解し、習得する力を兼ね備えているのである。

③　さまざまな体験・経験を積み重ねながら、言葉を広げる

＊２　一語文
第３章ｐ.43参照。

＊３　外言
第４章ｐ.53参照。

１歳を過ぎ、一語文[*2]を使うようになると、子どもはものと言葉をつなげて理解し、その言葉を積極的に外言[*3]化していくなかで、勢いよく言語を習得していく。２歳頃には、すでに「ママ、イタ」「ニャンニャン、バイバイ」などの二語文を発するようになり、語彙数が約200語へ、３歳頃には約1,000語の語彙を習得し、「～が」「～の」といったような助詞の使用も的確となってくる。さらに、３～４歳にもなると日常会話に困らないほどの話し言葉へと発達していく。

このように、子どもが言葉を話しはじめる時期から適切に言葉が育つ過程を得るためには、ただまわりの人と言葉を交わし合い、伝え合うだけではなく、子ども自身が能動的であり、さまざまな体験・経験をとおした言葉の習得が可能となる環境が重要なのである。岡本夏木は、この言葉の獲得過程において、子どもが能動的に活動することがいかに重要であるのかを以下のように述べている。「外からの刺激としてのことばをそのまま機械的に写しとっていくのではなく、自らの活動をとおし、選択的に自主的に使いはじめるのである」[3)]。このために、保育者は、いわゆる「子どもの主体的な活動」を基本とした保育に日々取り組みながら、子どもの言葉の育ちの環境を保障していくことが大切である。

（３）言葉を手段として使う

言葉は、さまざまな役割をもっている。この役割には一般的に、①コミュニケーションの手段、②思考する手段、③行動を調整する手段、④自己を表現する手段、⑤ものや行為を意味づける手段の５つがあるといわれている。